NO.732 2023　　聖イグナチオ教会報

2月

カトリック麹町教会

MAGIS

マジス　＝　「より、もっと、さらに」

教会テーマ　イエスがたたく希望の扉をひらいていこう　新たにつながるために　2030年に向けて一歩ずつ

分断ではなく繋がりへ

協力司祭　関根悦雄

「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆さんとともに。」これはミサの初めに司祭が会衆に呼びかける挨拶の言葉ですが、皆さんはこれをどのように受け止めているでしょうか。私はこれが単なる形式的な挨拶の言葉ではなく、三一神が私たちすべてを自分たちの愛の交わりに招いてくださっている現実を表現している意味深いものであると考えています。

私たちが信じている神は唯一の神ですが、単なる唯一の神ではなく、三位一体の神です。私たちの信仰理解によれば、父なる神が御子キリストを遣わし、キリストは救いの業を通して御父のもとから私たちに聖霊を送ってくださった。そのためにキリスト者は、聖霊の交わりにおいて、キリストを通して、御父に向かうという信仰形式を持っています。神は存在として一つで、その本質が愛の交わりであることはしっかりと確認しておく必要があると思います。

さて世界にはだれ一人自分と同じ人はいません。皆それぞれに違った存在で、考え方や行動が違います。国々の在り方もそれぞれで、その政治体制、経済状況、文化、言葉、習慣などが互いに異なっています。私が気になるのは、この違いがもとになって自分とは違う相手を排除する動きが強くなっている、自分たちの仲間でない者との交わりなど求めなくていいということになってしまっているのではないかということです。

もし三位一体の神を信じている私たちが、自分と違っているものは排除していいと考えるならば、私たちは神の招きに応えていないということになるのではないでしょうか。男女の区別、世代の違い、貧富の格差、国、文化、言葉の違いが、もし排除の原因・理由になっているとしたら、私たちは何を信じて生きているということになるのでしょうか。互いに違った者同士が協力し合って一つになるというのが神のみ旨で、神の国の完成に近づくことではないかと思います。私たちが一人ひとり違っているのは、違っているもの同士が協力することによってより良いものを生み出していくことができるのだと考えて、あらゆる排除を退けていくことができれば幸いであると思います。

私たちのカトリック教会は五大陸に広がっています。そこにはそれぞれの民族、言語、文化があり、そのありようは私たちのとは大きく違っているでしょう。しかしそのような差異があるにもかかわらずカトリック教会としては一つです。「カトリック」の意味は「普遍の」ということです。どんなに違っていても、それが排除の原因、理由になるのではなく、却って繋がることによって豊かになっていくことができるのです。

聖イグナチオ教会にはいろいろな国からの人、言語が違う人、老若男女、多種多様な職業の人が集まってきています。それぞれ違った人同士が互いに学びあい、三位一体の神の愛の交わりへの招きに応えていくならば、ますます真正なカトリック教会になり、神の国の実現に近づいていくことができるでしょう。

教会報 MAGIS 2月号

† 教会黙想会　P2～3
† 冬の教会行事とミサ　P4
† クリスマス風物詩　2つの馬小屋　P5
† 連載 光をつないで ②　P6

【2 月からの共同祈願】

† 2月4日（土）～2 月19日（日）

病にあっても導いてくださっている
神さまに身を委ねて、
これからも主の道を
歩み通せますように。

担当：活け花グループ

† 2月25日（土）～ 4月2日（日）四旬節

私たちの教会、インターナショナル共同体が、
四旬節の中で、心を神さまに向け直し、
回心して、神と人とに仕える私たちに、
生まれ変われますように。

担当：ザビエル会

教会黙想会

「教皇フランシスコの訪日を思い起こして ～教皇来日3周年を記念して～」

11月23日（水・祝）、秋の教会黙想会が主聖堂で行われました。事前申し込みの約130名とオンライン視聴者とともに、イエズス会日本管区長レンゾ・デ・ルカ神父のご指導のもと2部構成で実施。ミサも含めて約2時間半、スライドや動画を交えて充実した黙想の時を共有しました。以下は、その要旨です。（YouTube にて現在も動画配信中）

はじめに主任司祭のオチョア神父からレンゾ神父の略歴紹介がありました（右下枠内参照）。

第一部

教皇との歴史的つながり

教皇と日本人との交流は約450年の歴史があり、3年前の来日はそれを深める公式訪問でした。実際、1573年から始まった両者の往復書簡は1623年までの間に、合わせて31通にも及びました。

400年前に当時のキリシタンたちが教皇からの手紙を読んで黙想したように、今日私たちも、教皇フランシスコからいただいたさまざまなメッセージを感謝して味わいたいです。

聖霊の力がつなげた信仰

時代は下り1865年に「信徒発見」の出来事があり、1871年には当時の教皇ピオ9世から、それを祝して書簡が送られました。信仰という目に見えない事柄が、高山右近や天正遣欧少年使節の時代から何世代にも渡って伝わったのは「大きな奇跡」と言っても過言ではなく、1981年に初めて教皇ヨハネ・パウロ2世が来日するきっかけにもなりました。

来日を機に「殉教の丘」と呼ばれていた長崎県西坂の日本二十六聖人殉教の地は、イエスとともに登る「至福の丘」と呼び替えられ、当日はローマとのつながりを心の支えとして殉教した彼らを思い起こしつつ、悪天候の中ミサや洗礼式が行われました。

こうしたつながりを通して、一人ひとりの信仰が日本の教会を支えています。加えて信徒の祈りによって教会が目に見える姿を表すので、「私たちは教会の一部だ」と実感でき、参加の仕方も工夫され、パンデミックのお陰でネット配信ミサも実施されることになりました。

これらのことから、私たちは神に導かれているという意識を持ちたいです。偶然信仰が伝わったのではなく「神父がいなくても自分たちの信仰を守る」という潜伏キリシタンたちの熱い想いが信仰を伝え、高山右近も、当時の歴史の中心人物が相手でも信仰があったからこそ諦めなかったのです。信仰こそが大事だと感じ、人間の弱さを超える聖霊の力が働いたのです。今日の黙想会はそれを意識するのに大変よい機会です。

信仰は孤立していなかった

即位して1年足らずの2014年1月15日（水）恒例の一般謁見で、

レンゾ・デ・ルカ神父 略歴

1963年	アルゼンチン生まれ
1981年	イエズス会入会（ブエノスアイレス）
1985年	来日
1996年	司祭叙階
1997年 4月	日本二十六聖人記念館 副館長
2004年10月	〃 館長
2017年 3月	イエズス会日本管区 管区長（現在に至る）

教皇フランシスコは日本の潜伏キリシタンを世界の模範だと紹介しました。「教会は孤立していたけれども、信仰は孤立していなかった」。

このことが自分にとって何を意味しているのか。また自分がいただいた信仰を活かす方法を、この黙想会をきっかけに考えられたら周りの人々にとっても役立ちます。

（休憩を挟んで15分間、黙想の時を過ごしました）

第二部

誰もが幸福に暮らせる社会をめざして

2018年9月12日に、天正遣欧少年使節顕彰会特別謁見でローマに行き、教皇フランシスコに直接挨拶する機会に恵まれました。その場で「来年、訪日を考えています」と言われ、翌2019年11月23日の午後、羽田空港に到着されました。千代田区三番町にある駐日ローマ教皇庁大使館での司教団との話のなかで教皇は、日本における自殺者やいじめの増加に触れ「若者と彼らの困難に特に心を砕いてください。有能さと生産性と成功のみを求める文化が、誰にでも幸福で充実した生活の可能性を差し出せる文化になるように努めてください。日本の若者は、よい教育と周囲の助けを得てキリストの愛を証しする生き証人となり得るからです」と興味深く語られました。

すべてのいのちを守るため

長崎では爆心地に花束を供えられ「戦争で犠牲となるのは、権力や武器を持たない子どもや一般市民です」と強く訴えられました。また教皇ヨハネ・パウロ2世にならって西坂にも赴かれ、あらためてここを、あらゆる試練を乗り越え復活を伝える「恵みの丘」と位置付けられました。殉教者がいたからこそ、今日に至るまで信仰がつながったからです。

また広島での平和メッセージの中で「原子力の戦争目的への使用は、倫理に反し、核兵器の保有は、それ自体が倫理に反します」と述べられました。武器を持つこと自体が偽りの平和で、国同士の問題だけでなく、私たちの心の問題にも当てはまります。今日の黙想会にふさわしい内容だと思い、皆さんに紹介します。

さらに東日本大震災の被災者には「天然資源の使用に関して、特に将来のエネルギー源について、無関心から脱却し力を合わせて考えなくてはなりません」と語られました。教皇は震災を環境問題の一つと捉えて、エネルギーが人間の命より大事であるかのような生き方や商売の仕方が、津波による原発事故の被害者間に分断を引き起こしてしまったのであり、その一例として「互いに隣人を憎むように仕向けられた僕たちの苦しみは伝えきれない」と勇気を持って教皇に訴えた子どもの話を紹介されました。

イエスの生き方から学ぶ

東京カテドラルでの若者との集いでも同じように「宗教は恐怖、分断、対立を教えません。私たちが神とともに兄弟姉妹を愛するならば、その愛は恐れを吹き飛ばすからです（Ⅰヨハネ4：18参照）。イエスの生き方を見ることで、私たちは慰めを得ます。それはイエスご自身も『よそ者、避難民、ほかとは違う者であること』の意味を知っていたからです」と述べられ、イエスがそうであったように「差別されたとしても広い心を持ちましょう」と話されました。

そして、訪日のハイライトだった東京ドームミサでは、日本はキリスト教国ではないので、教皇は他の宗教関係者にも分かりやすく、また受け入れられやすく工夫した表現で語られました。

核兵器保有も倫理に反する

今年になって教皇は『戦争に対して』と題する本を出版されました。日本語訳はまだありませんが、その中から一つだけ紹介します。「広島で『核兵器の使用は倫理に反する』と述べた。これはカトリック教会の公教要理に入れるべきだが、使用だけでなく、核兵器を持つことも倫理に反する。それはどんな指導者であれ、その狂気によって、人類を破壊しかねないからである」

指導者は核兵器の使い方を知らないので今後どうなるか分からないという現実が語られています。その意味では、どの武器でも同じことが言えると思います。このことを心に留め、黙想を深めていただければ幸いです。

ミサ説教

福音朗読「忍耐によって、あなたがたは命をかち取りなさい」（ルカ21：19）を受け、「インターネットの普及などにより、私たちは忙しさに捕らわれ、周りが見えなくなりがちです。立ち止まり振り返りましょう。世の終わりの時、第一朗読（黙示録15：3）のように、歌を歌っていたのはイエスに従った人々です。私たちもイエスに従う『忍耐の心』を持ち、それを深めながら信仰を伝えていく恵みを願いたいです」と締めくくられました。

▲左からレンゾ神父、オチョア神父

冬の教会行事とミサ

主のご降誕おめでとうございます！

クリスマスミサの定員は250名に増え、中庭では青年有志によるクリスマスキャロルも行われました。3年ぶりに1月1日(日)0時のミサも行われました。

●クリスマスミニバザー
11月27日(日)、12月4日(日)
8時半ミサ後～13時半

昨年に続き、2日に分けて信徒主催のミニバザーを行いました。富士聖ヨハネ学園支援グループ、手芸グループ、ジョン・デ・ブリット イングリッシュセンター、ガレットグループ、メリエンダ、音訳サービスが手作り雑貨やお菓子などを頒布。ウクライナ支援の募金箱も設け、「平和を求める祈り」のカードを配布しました。皆様方には深く感謝いたしております。（2022年クリスマスバザー実行委員会）

●子どもと家庭のクリスマスミサ
12月17日(土)14時

柴田潔神父主司式のもと、教会学校の子どもとその保護者限定で行われました。今年度のテーマは「家族」。中高生会の聖劇のあと、サトルニノ・オチョア主任司祭は「羊飼いの中に貧しく、足の悪い男の子がいたという話があります。渡すプレゼントがなかったので、自分の命である杖を贈りました。私たちも温かな心をイエス様に捧げましょう」と話されました。ミサ後、サンタクロースから子どもたちにお菓子のプレゼントが手渡されました。

●子どもと家庭のクリスマスミサ 12月17日（土）14時（ライブ配信）

●主の降誕夜半のミサ 12月24日（土）12時（高齢者・基礎疾患のある方向け）、15時、17時、19時（ライブ配信）

●主の降誕日中のミサ 12月25日（日）7時、8時半、10時（ライブ配信）、18時

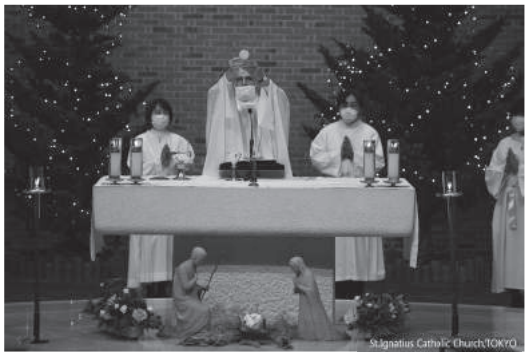
●神の母聖マリアの祭日ミサ 12月31日（土）12時（高齢者・基礎疾患のある方向け）、18時
1月1日（日）0時、7時、8時半、10時（ライブ配信）、18時　　＊すべて主聖堂にて

●主の降誕夜半のミサ
12月24日(土)19時～

キャンドルの火が聖堂いっぱいに灯り、ミサが始まりました。オチョア神父は「イエスが生まれたのはお城ではなく馬小屋でした。この知らせを最初に受けたのは差別されていた羊飼いでした。小さくて弱い赤ちゃんが私たちの救い主です。弱さをまとい、泣き、苦しむ人です」と話されました。最後はトランペットの音色とともに皆で主の降誕を喜びました。

●主の降誕日中のミサ
12月25日(日)10時～

「言（ことば）は神の表現であり、イエスそのものです。神は肉となって私たちの間に宿られました。これがクリスマスです。赤ん坊で何もできないから、私たちは逆説的にイエスを守って、育てなければいけない。そして、私たちは清められ、救われるのです」。司式のオチョア神父は、ヨハネ一章一節について語られました。



●神の母聖マリアの祭日ミサ
1月1日(日)10時～

司式の関根悦雄神父は「マリアはこれらの出来事を心に納めて、思い巡らしていた」（ルカ2:19）を引用し、「世界の状況を思い巡らしてください。神のメッセージは何か、あきらめずに考えましょう」と話されました。

1月1日は「世界平和の日」です。教皇フランシスコの今年度のメッセージ「誰もひとりで救われることはない。COVID-19からの再起をもって、皆で平和の道を歩む」の全文も読まれました。

聖イグナチオ教会のクリスマスの風物詩
2つの馬小屋に込められた思い

今年も聖イグナチオ教会には2つの馬小屋が飾られました。クリスマスを彩ったこれらの馬小屋に込めた思いを、各担当者に伺いました。

●聖堂前の馬小屋

2022年度より馬小屋の設置、撤去につきまして、松室康彦さんより引き継ぐ事となりました、教会学校リーダーOB、松隈と申します。馬小屋につきましてはわからない事も多くあり、皆様におかれましては、ご指導ご鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

一昨年、初めて作業に参加した際、とても重労働であると感じました。作業にあたりましては、まずは安全を第一に心がけていく事が肝要であると感じております。

聖イグナチオ教会の馬小屋は、クリスマス、年末年始の風物詩としての歴史も長く、毎年教会を訪れる多くの方々が楽しみにされている、クリスマスのシンボル的なものであると思います。

訪れる方々に、福音の訪れの喜び、神様のみ恵みの暖かな温もりが届くような馬小屋作りを、引き続き行っていきたいと思います。宜しくお願い致します。

（松隈庸一）

●ベトナム共同体による馬小屋

聖イグナチオ教会には30年前からベトナム人の共同体があり、毎月一回、ベトナム語のミサを捧げ続けてきました。2010年以降、ベトナムから多くの若者が勉強や仕事などをしに来日しています。彼らの中にはカトリック信者が多く、コロナ前の日曜日のミサには毎週約1000人が集まっていました。

彼らは母国にいる時から教会によく通い、教会は彼らの信仰を支える場所として意識しています。母国から離れて生活する彼らにとって、当教会は居場所であり、何らかの形で少しでも貢献したいという気持ちがありました。その気持ちを私に話してくれて、具体的にクリスマスに馬小屋を作りたいということが明らかになりました。一昨年の9月から考え始め、一昨年と昨年、馬小屋作りが実現し、とても喜んでいます。馬小屋の形のアイディアや実際にアレンジして作ったのは、全てベトナム青年会です。

ここで少しだけ、馬小屋にこめられた主な4つのメッセージをお伝えします。

①馬小屋の形は一昨年とほぼ同じですが、背景は富士山の代わりにたくさんの星が輝く空になりました。これは平和のために祈りたいという意向からです。同じ空の下に暮らしている全ての人間に平和があるように祈りたいということです。

②馬小屋の下の大小の羊の群れはルカ2章の場面を表現しています。

③右端の壁伝いに広がる街並みは当時のエルサレムをイメージしています。光があたって賑やかなエルサレムの街の雰囲気は、幼子イエスが誕生した貧しく寒い馬小屋との対比として見ることができます。どれほどイエスが私たちの犠牲となられたかを思い起こします。

▲ヨセフホールとテレジアホールの間に設置された馬小屋

④右にしっかりした石壁が置かれています。これは今は生まれたばかりの幼子イエスが人類のために親石となられるその生涯をイメージしています。

今年も数人のリーダーが中心となり約15人で馬小屋をたった1日で組み立てました。この貢献はとても小さなことですが、教会の一員として、関わるという気持ちを表すことができたと思います。

これからも、他の共同体の皆さんと一緒に信仰者として歩むことができるように願っています。今後とも、どうぞ宜しくお願いいたします。

（グエン・タン・ニャー神父）

馬小屋（プレゼピオ）とは…

馬小屋はイエスの降誕の場面を再現したもので、降誕祭に備え飾る習慣があります。教皇フランシスコは、プレゼピオの意味と価値をめぐる使徒的書簡「アドミラビレ・シニュム」でプレゼピオを準備し飾ることを、福音宣教の行為として示されています。

連載　光をつないで ②

幼き日の五島での出会い

「光をつないで」は、当教会の青年信徒が聞き手となり、信仰上の諸先輩からその人生と神との交わりについての話を聞くことで、神とともにこれからの人生を歩むためのヒントを得ることを目的とした連載です。2回目は、当教会信徒 マリアさん(80歳)に伺いました。

※語り手の名前は洗礼名

――韓国で生まれたと伺いました。いつ帰国されたのですか？

祖父の商売のため一家で渡韓していました。終戦により引き揚げたのは、私が3歳の時のことです。祖父が用意した小さな帆船に、祖父の仕事仲間やその家族数十人とともに乗り込みました。

すぐ日本に着けると思っていました。船頭さんが前方を指差し、このまま行けば下関に着くと言ったのを覚えています。ところが終戦直後で人々の不安も大きかったのでしょう。米軍に見つからぬようにと帆柱が切られてしまい、その上嵐にも襲われ、私たちは制御不能になった船で漂流することとなりました。

20日後にやっと漂着した島で人々が日本語を話しているのを聞きました。そこは長崎の五島列島の一つ、福江島の玉之浦地区だったのでした。

思いがけず始まった島生活と生涯忘れぬ出会い

同船していた家族の多くは休養した後に島を出ました。父は医者だったので島民に引き留められ、両親と私は福江島に残ることになりました。漂着したときには担架で運ばれるほどに衰弱していた父でしたが、島での生活の中で回復していきました。妹も生まれ、私は島の小学校に通い始めました。母は看護婦の資格を取って父を助けました。漁船が玉之浦に寄ると、「先生、これ」と言って漁師の方々が新鮮な魚をくださいました。春にはオタマジャクシを捕まえて遊びました。自然豊かな島の生活でした。

ある日お手伝いさんが祈りに行くと言うので後をついていき、坂を上った先にある井持浦教会を訪れました。教会の奥のルルドの聖母マリア像を見た瞬間、「なんて素敵な人だろう」と心を奪われました。それが始まりでした。

――それがきっかけで教会に通い始めたのですか？

いいえ、むしろその逆でした。帰宅後、とても美しい人の像を見たのだと母に報告すると、「もう絶対に行っちゃいけません」と叱られました。それから少しも経たないうちにお寺の日曜学校に入れられました。ときどき井持浦教会のマリア像を思い出しては、「やっぱりあの素敵な人にあやかりたい」と願っていました。

▶井持浦教会にあるルルドの聖母マリア像（峰脇英樹氏撮影）

学校帰りに訪ねた教会で

中学校に上がる頃、家族で東京に越してきました。2度目に教会を訪れたのはそれから数年後です。何が原因だったか忘れましたが心を患い、教会に行ってみようと思い立ちました。放課後、四ツ谷駅で途中下車して聖イグナチオ教会を訪ねました。立派な教会でした。聖堂には誰もおらず、薄暗くて心が落ち着きました。座ってしばらく祈りました。普段祈る習慣があったわけではありません。でもどういうわけかそのときは祈りました。自分を受け入れてくれる存在がいるのだと思いました。なぜかはわかりません。

それから数年後結婚し、義理の妹がカトリックの洗礼を受けていると知りました。洗礼を受けるには勉強するものなのだと知り、夫の同意を得て聖イグナチオ教会の入門講座に通いました。数年かけて私も家族も、洗礼の恵みに与りました。

◇

引き揚げ船が漂着した地が、明治初期の五島列島で唯一迫害を逃れた玉之浦地区であったというのは何という巡り合わせだろうか。

お話を伺った数日後、偶然にも五島教会群の写真集を目にすることになった。「日本で最初に造られたルルド」、「福江島・五島の奇石を集めて造られた」との説明とともに、岩石と緑の中に佇む井持浦教会のルルドの聖マリア像の写真を見つけた。

幼い頃目にした光景を昨日のことのように語るマリアさんの情熱のゆえんが、ようやくわかった気がした。一つひとつ石を積み上げた五島の人々の祈りの心は時を経て、幼き日の彼女の心にも、たしかに注がれたのだろう。

Family of St.Ignatius

～スペイン語圏から～

祈りの力

変形性膝関節症の激痛に何年も悩まされた。両膝の手術か車椅子のどちらかを選ばねばならなかった。苦悩の末手術を選んだ。

主に自分のいのちと信頼を任せきることができれば、手術に対する恐怖心は薄れていくだろうと思った。手術が成功して生きるか失敗して死ぬかはいざという時にはどうでもよくなるだろうと。いずれにせよ私たちが主の御手の中にいることだけは確かなのだから。

私の友人達はみんな熱心に祈り始めた。息子も全精力をかけて世界各国にいる友人達に祈りをお願いした。

やがて私は落ち着きと平安と喜びを感じるようになり、身の回りの人たちを励まし笑わせる余裕まででてきた。医療スタッフは、こんな信仰を持つ患者は初めてだと言った。大勢の祈りの力を肌で感じたおかげで、イエスは私たちの望みに強く応えてくれるのだとあらためて再確認できた。私は歩けなかった。だが今は歩く喜びを噛みしめながら、笑顔で天を仰ぐ。(Pilar Herboso)

●宣教司牧評議会からのお知らせ●

（12月１日開催）

1. 柴田神父から、防災チーム・コアメンバーと、夏の教会学校キャンプのプロジェクトチームの結成のお知らせがありました。双方、具体的な対策が始まりました。
2. クリスマス・イブについて、12時の「高齢者ミサ」は予約なし、各ミサはヨセフホールにてパブリックビューイング可能、ミサ開始前に英語グループのエンジェルスやベトナムのプレセピオ制作のビデオを流す、ミサの合間にキャロリングを行うなどの今年度の企画、その他が報告されました。
3. 新年祝賀会はオンライン配信のみ、祝賀会の予算で、子ミサ参加の子ども達におメダイとお菓子の配布をすることが承認されました。
4. 福祉関連グループ主催の「新年炊きだし」にマリアテレジア基金から10万円の支援が認められ、財務委員会に提出しました。

（１月12日開催）

1. 2023年ワールドユースデー・リスボン大会の派遣準備状況の報告がありました。
2. ３月21日（火・祝）開催の四旬節黙想会指導は堀江節郎司祭です。準備を進めていきます。

●ミサに関して●

1. １月９日（月）から平日18時のミサを再開しました。
2. １月15日（日）から日曜８時30分のミサは予約不要となりました。
3. １月より日曜12時、16時30分の英語ミサ、13時30分のスペイン語ミサは予約不要となりました。
4. 新型コロナウイルス感染症対策で入堂制限等を含め、上記内容を変更をする場合があります。

●クリスマスミニバザー報告●

昨年11月27 日（日）と12月４日（日）に行ったミニバザーは６グループの出展、4 支援グループのご協力で無事終了しました。頒布金、募金は共に当教会を通じ、ウクライナ支援のためにイエズス会難民サービス（JRS）に寄付いたしました。

２年連続での小規模バザーでしたが、皆様の温かいご協力に心から感謝いたします。頒布金、募金の詳細は以下の通りです。

頒布金	￥915,960
募金	￥404,294
合計	￥1,320,254

2022 年クリスマスバザー実行委員会

●財務報告●

- 11月20日（日）「ミャンマーデー」の献金728,913円を東京教区を通じてミャンマーの教会へ送金しました。
- 12月４日（日）宣教地召命促進の日の献金 667,364円はローマ教皇庁へ送られ、全世界の司祭養成のために使われます。
- 2022年の司祭召命のための一粒会への献金は2,159,283円になりました。皆様のご協力に感謝いたします。

2月の典礼と行事

2　（木）　主の奉献の祝日		
3　（金）	**福者ユスト高山右近の記念日** 初金曜日	
5　（日）	**年間第 5 主日** **日本26聖人殉教者の記念日**	**新受洗者と転入者のためのオリエンテーション　10:00　ヨセフホール**
8　（水）		傾聴ルーム　13:00〜15:00　ヨセフホール
11　（土）		**世界病者の日**
12　（日）　年間第 6 主日		日曜サロン　11:00 ～ 12:30　ヨセフホール **ミッション 2030 黙想と分かち合い　13:00　ヨセフホール**
19　（日）　年間第 7 主日		
22　（水）　灰の水曜日（大斎・小斎）		**ミサと灰の式　7:00　12:00　19:00**　**四旬節の期間中愛の献金** 傾聴ルーム　13:00〜15:00　ヨセフホール
24　（金）		**十字架の道行　18:45 マリア聖堂（聖週間前までの毎金曜日）**
26　（日）　四旬節第 1 主日		**洗礼志願式　10:00** 日曜サロン　11:00 ～ 12:30　ヨセフホール

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため予定が変更になる場合があります。
最新情報はイグナチオ教会ホームページでご確認ください。

2023年ワールドユースデー（WYD）リスボン大会
若手信徒派遣のためのご支援のお願い

ワールドユースデー（WYD）2023 公式日本巡礼団に、今回も聖イグナチオ教会から若手信徒を派遣するプログラムが始まりました。当教会では2016年クラクフ大会に 7 名、2019年パナマ大会に 3 名の若者を皆様の寛大なご支援を賜って派遣することができました。

2023年はポルトガルの首都リスボンでの開催となります。ワールドユースデー（WYD）リスボン大会に向けた当教会での募集は既に 1 月29日に締め切られ、現在、厳正なる選考の段階です。応募者は課題レポートでの一次選考を経て、派遣選考委員会による二次選考の面接を受け、3 月には派遣者が決定され、主任司祭より派遣任命されます。

今大会においても派遣決定者の渡航費用を支援するため、献金活動を行います。今回は燃油サーチャージ高騰と円安の影響で一人当たりの渡航費用が約45万円と予定されています。派遣者の自己負担金は 3 万円。信徒の皆様の献金活動などを通して残りの費用を支援します。献金活動は主日の各ミサ前後の時間帯を中心に献金箱設置や献金封筒（振込用紙在中）を利用して行って参ります。

聖イグナチオ教会の次世代を担う若手信徒のため、皆様の温かいご支援とお祈りを何卒よろしくお願い申しあげます。

ミッション2030 黙想と分かち合い
祈り・つたえ・つながり・ともに歩む〜
小さな私たちの分かち合い

第 1 回テーマ
「あなたにとって教会は“わが家”になっていますか」

開催日時：2023年 2 月12日（日）13時〜15時
プログラム：①オチョア神父の講話
②祈りと黙想
③小グループでの分かち合い
④分かち合いの報告
開催方法：ヨセフホール（定員50名）
オンライン Zoom（定員35名）
申込方法：ホームページからインターネット申込
または教会事務室で所定の申込用紙に記入
（Zoom 参加をご希望の方はインターネット申込をご利用ください）
主　　催：ミッション2030プロジェクトチーム/カトリック麹町 聖イグナチオ教会

大会テーマ：「マリアは出かけて、急いで山里に向かった」（ルカ 1:39）
開催地：ポルトガル　リスボン
開催日程：2023年 7 月25日（火）〜 8 月10日（木）
または、7 月26日（水）〜 8 月 9 日（水）
派遣人数：若干名

聖イグナチオ教会ワールドユースデー2023
リスボン大会派遣準備委員会

主任司祭：サトルニノ・オチョア
助任司祭：ボニー・ジェームス
グエン・タン・ニャー
柴田　潔
協力司祭：ヘネロソ・フローレス
ハビエル・ガラルダ
関根　悦雄
マヌエル・シルゴ
シスター：イベッテ・サンチェス
（セントロ・ロヨラ）
フロール・フロレーセ
（ジョン・デ・ブリット　イングリッシュセンター）

ミサ参加方法はホームページ、教会事務室で確認してください。

ミサの時間　Mass
【平日 Weekday】主聖堂　Main Chapel
7 :00/12:00/18:00
【土、日曜日 Saturday & Sunday】主聖堂　Main Chapel
土曜 18:00 日曜 7:00/8:30/10:00/18:00
12:00（English）/13:30（Español）/
15:00（Việt Nam）/16:30（English）
【月の第 1 日曜日 1st Sunday】
Our Lady's　Chapel
12:30（Português）/16:00（Polski）
【月の第 2 第 4 日曜日　2nd & 4th Sunday】
Our Lady's Chapel　16:30（Indonesian）

カトリック麹町教会
（聖イグナチオ教会）
〒 102 － 0083
千代田区麹町 6 － 5 － 1
TEL 03 － 3263 － 4584
FAX 03 － 3263 － 4585
http://www.ignatius.gr.jp
ホームページ　フェイスブック

『マジス』へのご意見ご要望などのお便りは事務室までお寄せください。